

子ども生活実態調査

2010.5.22

札幌たのしい授業・研究サークル用手抜きレポート

丸山秀一

仮説実験授業研究会・北海道

このほどベネッセが2009年に実施した「子ども生活実態基本調査」の結果を公表しました。これは小学4年生から高校2年生の約1.5万人を対象とした調査で、前回は2004年に行っています。では、その結果を見ていきましょう。

まず、ベネッセは、その間の社会情勢を表(別紙)にして示していますので、みなさんも確認しておきましょう。こういうところからも、調査の意図が感じられます。

このレポートを読むには、以下のデータが必要です。ベネッセのサイトからダウンロードしてください。

「第2回子ども生活実態基本調査速報版」
http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009_soku/index.html

【問題】

最初の調査項目は「親との会話」です。「親とよく話をする」「親とときどき話をする」という子どもたちの割合は、5年前と比べて増えているでしょうか。また、相手が「父親」と「母親」では違うでしょうか。

予想 父親（ ） 母親（ ）

ア 増えている

イ 変わらない

ウ 減っている

小中高で違うでしょうか

親との会話

父親，母親とも会話をする子どもたちの割合が増えています。特に「友達についての会話」は，小中高すべてで増加しています。それに対して，ほとんど変化がないのが「社会の出来事についての会話」です。

小学生の 8 割，中高生の 7 割が，「母親と学校の出来事について会話」しているのです。子どもの性別による差があると思いますが，それはこの調査からはわかりません。

【問題】

次は「親子関係」です。「親との会話」は増加していますが，親子関係も五年前と比べて良くなっているのでしょうか。

予想

- ア 良くなっている
- イ 変わらない
- ウ 悪くなっている

小中高で違うでしょうか

親子関係

これも小中高で同様の傾向が見られます。「勉強を教えてくれる」「相談に乗ってくれる」「大人として扱ってくれる」は、すべて割合が上昇し、「口出しする」「約束を守らない」「考えを押しつける」がすべて減少しているのです。

【問題】

つぎは「友だち関係」です。

「違う意見を持った人とも仲良くできる」「友だちが悪いことをしたら注意する」と答えた子どもたちの比率はどう変化したでしょうか。

予想

ア 増加

イ 変わらない

ウ 減少

小中高や男女で違いはあったでしょうか。

友だち関係

このふたつは、小中高すべてで増加しています。およそ7割の子どもたちが「違う意見を持っていても仲良くできる」と答えているのです。男女差もほとんどありません。

「悪いことをしたら注意する」も増加していますが、こちらには明確な男女差があります。女子の方が注意できるようです。

【問題】

では、別の質問「仲間はずれにされないように話を合わせる」「グループの仲間同士で固まっていたい」と答えた子どもたちの比率はどうでしょうか。

予想

- ア 増加
- イ 変わらない
- ウ 減少

小中高や男女で違いはあったでしょうか。

望んでいる関係

「違う意見でも仲良く」が7割、「悪いことには注意」が5割ですが、「仲間はずれにされないように話を合わせる」ことに気を遣っている子どもたちも増加しています。特に高校生男子は、そのことを気に掛けているようです。また「グループ同士で固まりたい」も増加しています。そして、グループを作りたいのは、男子が多いのです。おそらく女子はグループが「耐えられないもの」になることを知っているためかも知れません。

それにしても、これらの矛盾した解答が子どもたちの姿なのです。

【問題】

次は「生活習慣」です。「早寝早起き朝ご飯」という宣伝は、この五年間で効果があったのでしょうか。

予想

ア 増加

イ 変わらない

ウ 減少

小中高で違うのでしょうか。

早寝早起き朝ご飯

子どもたちは、早寝になり、早起きになり、朝ご飯を食べるようになっていきます。そして、結果として小学生と高校生では睡眠時間が減少しています。これは「ラジオ体操」で言及したように、日本人にある「早起き信仰」のためでしょうか。

【問題】

では、「好き嫌い」「栄養ドリンクやサプリメントを飲む」「ダイエットのために食べる量を減らす」についてはどうでしょうか。

- ・「好き嫌い」は()
- ・「栄養ドリンクやサプリメントを飲む」は()
- ・「ダイエットのために食べる量を減らす」は()

予想

- ア 増加
- イ 変わらない
- ウ 減少

食習慣

偏食や「栄養ドリンクやサプリメントを飲む」という子どもの割合は減ってきています。しかし、「ダイエット」をする子どもたちの割合は増えています。

【問題】

次は「メディア」との関わりです。ゲームをする子どもの割合は増え、パソコンや携帯電話もよく使われるようになってきています。でも、本や新聞などは読まれなくなってきています。

では、次のメディアはどうでしょうか。

- ・ マンガや雑誌 ()
- ・ 学校でのパソコン使用 ()

予想

- ア 増加
- イ 変わらない
- ウ 減少

マンガとパソコン

マンガや雑誌は、まだ8割ぐらいの子どもたちが読んでいますが、その割合は、前回調査よりも減少しています。

おもしろいことに、「学校でのパソコン使用」では、7割の子どもが「ほとんど使っていない」と答えています。パソコンはその名の通り、「パーソナル」になったようです。

【問題】

次は「生活の満足度」です。子どもたちは、「友だちとの関係」「家族との関係」「自分が住んでいる地域」「学校の先生との関係」「自分の性格」「今の日本の社会」に、それぞれどの程度満足しているのでしょうか。これらの満足度は五年前と比較してどうなっているのでしょうか。

予想

- ア 増加
- イ 変わらない
- ウ 減少

【問題】

これらの項目のうち、一番満足度が低いのは何でしょうか。

予想

- ア 友だちとの関係
- イ 家族との関係
- ウ 自分が住んでいる地域
- エ 学校の先生との関係
- オ 自分の性格

満足

高校生の「自分の性格」満足度以外，すべての満足度が上昇しています。しかし，「今の日本社会」に対する満足度は，3割ほどです。これは，マスコミの報道による影響と考えられます。正義感の強い子どもたちは，伝えられる日本の現状に満足できないものを感じているのです。

「自分の性格」に対する満足度も，低くなっていますが，自分の性格のどんなところが不満足と思っているのでしょうか。これも，メディアや社会が提供する「理想の人物像」とのギャップが原因なのかも知れません。是については，次の「質問」である程度わかります。

【問題】

次は「将来像」です。「40歳ぐらいになったときになにをしているか」という質問です。この調査は前回には行われませんでした。

質問の項目は全部で8つですが、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた子どもたちが多かったものと少なかったものにはっきりと二分できます。あなたも予想して、ふたつに分けてみましょう。

「そう思う」という回答が多かったもの4つはどれでしょうか。

予想

- () 親を大切にしている
- () 幸せになっている
- () 子どもを育てている
- () 自由にのんびり暮らしている
- () 多くの人の役に立っている
- () お金持ちになっている
- () 有名になっている
- () 世界で活躍している

不満の原因

この質問のおもしろいところは、「そうなりたいか」ではなく、「そうになっていると思うか」と予想を聴いているところです。だから、「自分の性格」や「日本の社会」への満足度が低いから、「この質問に対する回答の多いものが、子どもが本当に望んでいる」とは単純に考えられないことになります。「世界で活躍している」という将来予想は1割程度しかありませんが、「そうなりそうにない自分や社会」に不満なのかも知れないからです。

それらは次の質問でも分析できます。

【問題】

次は「将来なりたい職業はあるか」という質問です。

「ある」と答えた子どもたちは、今回のどれぐらいいるのでしょうか。また、それは前回と比較してどうなのでしょう。

予想 どれぐらいいるのか

- ア 7割以上
- イ 半分ぐらい
- ウ 3割以下

予想 前回と比較して

- ア 増加
- イ 変わらない
- ウ 減少

なりたい職業

学年を問わず、「なりたい職業がある」子どもたちは、ほぼ半数で、前回調査よりも減少しています。

「なりたい職業がない」という状態では、「お金持ちになっている」「有名になっている」という予想が立たないのも当然とも言えます。

【問題】

では、具体的にになりたい職業は何なのでしょう。男子で見ると、小学生のになりたい職業のトップが「野球選手」で、二位が「サッカー選手」です。これは中学生になっても変わりません。

では、男子高校生のになりたい職業のトップは何でしょうか。

予想

- ア 野球選手
- イ サッカー選手
- ウ 公務員
- エ 教師
- オ コンピュータープログラマー
- カ そのほか

安定志向

それは「教師」です。そして二位が「公務員」です。調査結果を見ると、男子小学生にとって教師は、全く魅力のない職業のようで、10位以内に登場しません。しかし、中学生になると、4位になり、高校生ではトップとなるわけです。これは教師の職業を魅力的と考えているからなのでしょう。第二位が公務員であることを考えると、高校生は「安定した職業」=「あんなんでもやっつけていける」として教師を見ているだけなのかも知れません。

不思議な調査

以前もベネッセが行った調査について分析しました。その調査では「子どもたちが学校や授業がたのしいと感じている割合が増加している」というものでした。今回の調査でも、肯定的な子どもたちの姿が浮かび上がってきます。これが、日本の教育の現状なのでしょうか。

しかし、これら結果は拙作の「グラフから見た日本の教育の現状」とあまりにもかけ離れています。不登校や校内暴力は右肩上がり上昇を続け、教員の休職者も増加する一方なのです。

つまり、彼らの「声」は、こういった調査には全く反映されていないわけです。こうして子どもたちは「いい子とそうでない子」に二極化しているような気さえします。